

聖書：マルコの福音書 8：31～9：1

説教題：自分の十字架を負って

日時：2025 年 11 月 30 日（朝拝）

ペテロは前回、私たちの人生で最も大事な問いに見事に答えました。「あなたはわたしをだれだと言いますか」というイエス様の問いです。これにどう答えるかは、私たちが永遠のいのちに生きる者となるかどうかを決定づける人生最大の問いと言えます。ペテロはこれに「あなたはキリストです」と答えました。少し前までイエス様から「まだ悟らないのですか」と嘆かれていた弟子たちでしたが、イエス様の忍耐深い導きにより、ついに霊的な目が開き始め、イエス様は誰なのか、その本質を告白するに至りました。こうして学びの第一段階は終了します。

この告白を受けて今日の箇所からイエス様はいわゆる「受難予告」を語り始められます。ペテロはイエス様がメシアであることは認めましたが、そのメシアとはどういう方なのか、どのようにして救いを成し遂げるのか、その鍵となる受難についてイエス様は語られるのです。ここからこの福音書は後半部へ入ります。

最初の 31 節の言葉は衝撃的でした。イエス様はそこで「多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日後によみがえらなければならない」と教え始められました。ここの「～しなければならない」という言葉はギリシャ語の「デイ」で、英語のマストに相当します。つまりイエス様は単にこれから「そうなるだろう」と言われたのではなく、「そうでなければならない」と言われたのです。これは神のご計画に基づく必然ということです。

イエス様の身にこのようなことが降りかかるのは、これ以外にイエス様が私たちを救う方法はないからです。罪に堕ちた人間を赦し、神との正しい関係に回復させるためには、何よりもその罪の問題が処理されなければなりません。それができる唯一の方法が、聖なるお方が私たちの身代わりにさばきを受けるというものでした。十字架上で苦しみを受け、贖いの死を遂げることでした。そのために神の御子が地上に来られたのです。ですからこれは「必ず起こらなければならないこと」でした。32 節に「イエスはこのことをはっきりと話された」とあります。これまでたとえを多く用いたイエス様でしたが、ここでは弟子たちが明確に理解できるように直接的に語られたので

す。それだけに弟子たちが受けた衝撃は大きかったと思います。

するとペテロはイエス様を脇にお連れして、いさめ始めました。「いさめる」と訳されている言葉は、イエス様が悪霊を叱りつけた時に使われている言葉と同じです。つまりペテロは大胆にもイエス様を叱責するという行動に出たのです。イエス様に「そんなことを言うてはいけません」と厳しく教え諭そうとしたのです。ペテロにとってイエス様の今の言葉は全く受け入れられないことでした。当時のユダヤ人は、メシアと言えば異邦人の支配下から神の民を解放し、イスラエルを高く上げてくれる救い主を期待しました。あの旧約のダビデのように、先頭に立って戦い、民に勝利と栄光をもたらす輝かしい王のイメージです。なのにご自分をメシアと認めたイエス様が、これから苦しめられ、捨てられ、殺されるなどと言っています。一体あなたは何を仰っているのか。そんなことはあり得ない！とペテロはイエス様を諭そうとしたのです。

そんな彼にイエス様は「下がれ、サタン」と言われました。たった今、立派な告白をした彼でしたが、次の瞬間に「サタン」と呼ばれています。「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」とイエス様は言われました。ペテロはただ人間の思いから行動しているだけです。全然神のことを思っていないと言われました。このようにペテロを始め、弟子たちは霊的な目が見え始めてはいたものの、まだまだの状態だったのです。前回の 22～26 節で見た、イエス様に一度手を当てられて少しは見えるようになったが、まだはっきり見えていなかった人の姿に重なります。

このイエス様の「下がれ、サタン」という言葉で思い起こされるのは荒野の誘惑の記事です。あそこでサタンは「もしひれ伏して私を拝むなら、これらすべてをあなたにあげよう」と言いました。この誘惑のエッセンスは、十字架を回避して、今すぐに栄光を手に入ろう！というものでした。苦しい道へ進む必要はないとする誘惑です。イエス様はそれと同じ誘惑をここに見て取って「下がれ、サタン」と言われたのでしょうか。この「下がれ」という言葉はもう少し正確に訳せば「わたしの後ろに回れ」という表現です。イエス様は十字架への道に立ちほだかろうとするペテロにわたしの後ろに回れ！と言われ、なおご自身は十字架への道を選び取ることを明確にされたのです。

さて、イエス様がこのような方であられることは、その弟子の歩みを規定するものともなります。34 節に「それから、群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言わ

れた」とありますから、このあと語られるのは狭い意味での弟子たち向けの言葉ではなかったことが分かります。「だれでも」と言われている通り、すべてのクリスチャン、また主に従いたいと思うすべての人に向けられた言葉です。まず 34 節：「だれでもわたしに従って来なければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」

イエス様はまず「自分を捨て」るようにと言っておられます。この基礎はイエス様がそうであるということです。イエス様はご自分を第一にしていません。神のご計画になるためにご自分を否定しています。神に「はい」と言うために、自分には「いいえ」と言う道を進んでいます。その主に従う私たちも同じようであればならないと言われています。生まれながらの私たちは常に自分を第一にしようとします。自分の欲求、自分の安全、自分の満足、自分の楽しみを優先します。それを捨てて、キリストにおける神への従順を第一にする。神に常に「はい」と言うために、自分には「いいえ」を言い続けるのです。神の御心に従うことを自分の願いや計画よりも優先させるのです。

さらに「自分の十字架を負って」と言われます。1 世紀において十字架は最も残酷な死刑の方法でした。自分がかけられる木を背負って刑場まで歩き、そこで磔にされ、さらし者とされ、極度の苦しみと疲労の中で死んで行きます。そのような辱めを受けつつ、最後には自分のいのちまでも放棄することをこれは意味します。これを考える際にも思うべきは何よりもイエス様が先にこの道を歩まれたということです。それも私たちの救いのためにです。そのイエス様に感謝して、イエス様について行きたいと願うなら、自分自身も同じような扱いを受けることを覚悟しなければならない。そうしてわたしに従って来なさいとイエス様は言っておられます。ですから信仰生活とは、嫌なことや苦しいことは全部主に負ってもらい、自分は楽な道だけを行くというものではないことが分かります。主を信じ従うとは、私たちのために十字架を背負って先頭を進まれるイエス様を見つめて感謝し、自らもその後を行進することです。そしてその道の中で必ず与えられる自分の十字架を背負って歩くことです。

思わず後ずさりしてしまいそうな私たちに対し、イエス様は 35 節以降で大いなる警告と励ましを語っておられます。ここで言われているのはある種の「霊的経済学」です。良く考え、良く計算して、自分の道を選び取るようにとイエス様は迫っていま

す。まず 35 節に「自分のいのちを救おうと思う者は」とあります。これはこの世の自分のいのちを守り、保とうとする態度のことです。十字架を負わず、苦しみを避け、この世の祝福や成功、名声、繁栄を求めて歩むことです。しかし、その人はやがていのちを失います。救い主イエス様との関係を大事にせず、イエス様を無視して歩んだからです。従って救われません。反対に「わたしと福音のために」、つまりイエス様と福音のために、いのちを失う者——この世で自分の損失を厭わずに主に従う者——は、そのいのちを救います。イエス様と真実に結ばれている者として、まことの命、永遠のいのちに生きる者とされるのです。

36 節に「人は、たとえ全世界を手に入れても」とあります。私たちはこの世の祝福や成功を求めてあくせく働き、ついには全世界を手に入れるほどになるかもしれませんが。しかしそれはその人を救いません。なぜならこの世のものはやがてすべて過ぎ去るからです。I コリント 7 章 31 節:「世と関わる人は関わりすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。」 I ヨハネ 2 章 17 節:「世と、世の欲は過ぎ去ります。」やがてその人は、自分の永遠の運命のために何の準備もして来なかったことを突然思い知らされます。つまり、最も大事な計算を誤ったのです。「自分のいのちを買い戻すのに、人はいったい何を差し出せばよいのでしょうか」とイエス様は問われます。その日に差し出させるものをその人は何も持っていません。時すでに遅しということになります。

イエス様は 38 節で言われます。「だれでも、このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことを恥じるなら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るとき、その人を恥じます。」十字架の道を進まれるイエス様に従うことは、この世の感覚からすれば恥ずかしいと思うことです。I コリント 1 章 23 節に十字架は「ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚か」とあります。ですからそういうイエス様に従って歩めば、世から見下され、変わり者だと思われます。そのためイエス様との関わりを恥じる誘惑にさらされます。むしろ世の価値観に合わせて、華やかで「いいね」と言われる生き方をしたくなる。しかしもしイエス様とその言葉を恥じるなら、イエス様も再臨の日、父の栄光を帯びて来られる最後の審判の日に、その人を恥じると言われます。永遠の運命が決まる最も重大な日にイエス様から「あなたを知らない」と言われるのです。これは当然のことです。ですからイエス様は、この誤った道を行かないよう警告しておられるのです。反対に、この世でイエ

ス様を恥じず、公に認める歩みをした人には大きな約束があります。マタイの福音書 10 章 32 節：「だれでも人々の前でわたしを認めるなら、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。」 これこそ正しい計算が良くできるまことに賢い人の道です。私たちはどちらの道を選ぶ者でしょうか。

最後の 9 章 1 節は 8 章の最後の流れと一つのセットになっていると考えられます。ここは解釈が難しい箇所ですが、全体として語っているのは、主に従う者はこの世においても来たるべき神の国の栄光の前味を味わうということでしょう。直前の 8 章 38 節は主の再臨の日という将来の出来事に言及していました。しかしイエス様は将来だけではなく、今ここで神の国の力を体験することが可能だと言われています。問題は「神の国が力をもって到来しているのを見る」とはいつを指すのかという点です。多くの学者が述べる有力な解釈は、次の箇所です。語られる高い山での主の変貌を指すというものです。マタイ・マルコ・ルカの三つの福音書が、いずれもこの言葉と変貌の記事を並べていることから、その関連が伺えます。そこでは十二弟子の中の 3 人だけがこの場面を目撃します。これは「神の国が力をもって到来する」ことの先取りであり、その最初の成就だと見る理解は自然であると思われます。

また「キリストの復活」を指すと理解する人も多くいます。復活こそ神の国が力をもって臨み始めた決定的な出来事だからです。さらにその後の「キリストの昇天」「ペンテコステにおける聖霊の注ぎ」「全世界への福音宣教の始まり」を指すとする解釈もあります。どれか一つに限定するのは難しいことで、むしろ神の国のこのような段階的な現れのすべてに今日の言葉は関わると考えることもできるかと思います。いずれにせよポイントは、主に従う人はこの世においても、来たるべき神の国の栄光の一端を味わい始めることができるということです。その先取りを与えられつつ、やがての最終的な栄光へと向かうのです。

以上、イエス様は今日の箇所です。初めて受難予告をされ、ご自身に従う者にも「自分の十字架を負ってついて来るように」と命じられました。ある人は「今の時代には迫害もないし、信教の自由も保証されている。そんな中で十字架を負うとはどういうことか」と問うかもしれません。しかし十字架は先にも見た通り、辱しめの象徴であり、この世から見ればつまずきであり、愚かに映ることです。そのイエス様を主として従うなら、世の人々から奇異な目で見られ、理解されず、蔑まれることはあり得ます。

また、イエス様に従うことは、この世と異なる価値観に生きることです。この世は「自分を第一にする」生き方を肯定し、物質主義、成功主義、快樂主義が文化の中心にあります。そんな中で主の弟子は、神の御心に従うことを第一とし、神と人とを愛する道を進もうとします。それは世から見れば損をする生き方であり、自分を主張するより、むしろ他者に仕える生き方です。敵を赦し、愛し、犠牲を払う道です。このようなこの世の価値観と正面から異なる道を行くことは当然大きな戦いとなり、私たちの重荷ともなります。さらに世は、ただ見ているだけでなく、自分たちと異なる道を歩む人々を排除しようと迫って来ることがあります。当時の長老・祭司長・律法学者といった宗教指導者たちがイエス様を殺そうとしたのは、イエス様の光が彼らの誤りを明らかにしたからです。イエス様の存在によって、自分たちの義がいかに虚しいかがあばかれたのです。同じように不十分でなお罪を犯す者ではありますが、地の塩・世の光として歩む私たちも、世から煙たがられ、疎まれ、嫌がらせや攻撃を受け、その結果、不利益を被ることがあり得ます。職を失うことさえあり、地域・学校・家庭において孤立させられることも起こり得ます。苦しい状況に追い込まれることもあるでしょう。しかしそんな中でも、自分に与えられた十字架を負って主について行く先に、真のいのちがあるとされています。これらのことを恥じて、この世での自分のいのちを救おうとする人は最後にいのちを失います。ここでイエス様を恥じる人は、やがて主から恥じられるのです。反対に今ここでイエスを主と告白し、主に倣って十字架を負う人こそ、やがての日に「あなたを知っている」と言われ、復活の栄光に入れられます。さらにその歩みの途上においても、神の国の力を知るという励ましが与えられています。

この後も主の受難予告は繰り返して語られます。私たちはペテロのように、人間の思いで退けることがないようにしたいと思います。イエス様ご自身が私たちの救いのために、自分を捨て、十字架を負って、私たちの先を進まれます。そのお姿を見つめて、感謝と愛をもって主と告白し、その歩みの中で与えられる十字架を自らも担い、むしろこれを誇りとして従う者でありたいと思います。そしてまことの命、永遠のいのち、真の栄光に至る救いの道を最後まで歩む者とされたいと思います。